

# 「目から鼻へ抜ける」話：万葉「於伎蘇乃可是」をめぐって

吉田，達  
昭和二十三年九州大卒

<https://doi.org/10.15017/16301>

---

出版情報：文献探究. 3, pp.3-11, 1978-09-23. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：

「目から鼻へ抜ける」話

——万葉「於伎蘇乃可足」をめぐって

よしだ いたる

四・五年前のこと、ある友人から「目から鼻へ抜ける」という詞の語源的な意義を尋ねられたことがあった。わたくしは、その時即座に答えることができなかった。それで、それ以来、この奇妙な感じの成語が頭の隅に引つかかっている。辞書類を手にする度にいろいろと引いてみたのだが、いつにうに適切な解答にめぐり会えないままに過ぎていた。それが、昨日のことであるが、他のことを調べていた思わぬ本の中で、ふと心に感得されたものがあったので、そのことを少し書いてみよう。それは、『古事記』の「序」について、西宮一民氏が書かれた文の中であった。

『古事記序』の中に、「時有舍人、姓稗田名阿礼、年是世八、為人聰明、度目諳口、私耳勤心」という箇所があることは知られている。この文中にある「度目諳口」という一句の中に、わたくしは「目から鼻へ抜ける」の本義を觀せられる思いがして、一瞬、息を詰めた。

この文の前後の意味は、つまり、舍人稗田阿礼の人となり聰明であることを賞めて、「一旦読んだり聞いた

りしたことは、それをしっかりと心に受けとめてお忘れず、時として、その文あるいはことばが彼の口を衝いて言い表わされる」というのであろう。西宮氏も指摘されているように、この表現は、どうも聰明な人を賞賛する場合の常套句であるように、氏はそこで五例の類似した表現を列挙しておられる。それ等の例示群と通過し、乃から感得したことなので、やはり煩をいわず引用してみた。

- (1) 処士平原彌衡、年二十四、字正平、淑實貞亮、英才卓犖、初涉芸文、升堂觀奧、目所一見、輒諳於口、耳所暫聞、不忘於心。(日文選、孔融薦禰衡表)
- (2) 目所一見、輒諳於口、耳所暫聞、不忘於心。(句魏志、荀彧伝、裴松之注)
- (3) 経目而諳於口、過耳而聞於心。(日文選、夏侯孝若、東方朔画贊)
- (4) 目所一見、輒諳於口、耳所暫聞、不忘於心。(句抱朴子、外篇、彈禰衡篇)
- (5) 識悟明敏、過目必能、一聞則諳。(句高僧伝、卷二、鳩摩羅什)

と列挙して、「それらのいずれによったかと言えは、やはり『文選』の權衡の例と考へるべきであらう」と述べておられる。<sup>(3)</sup>「右の例示の順序は該書の順序であるが、番号と傍注の◎印は、説明の必要上、わたしが付した」

一見して、(1)(2)(4)が類型的に全く同一であることは容易に知られる。そして、いずれの例にも、次句に「心」という語が置かれていることの意味に注意したい。(5)の表現は、他と異ってはいるが、やはり「能」という心の機能に関する語を用いている点は、変わりがない。それは、対象である人物の不思議に傑出した心的作用に向かつて、筆者たちの意識が強く指向していた証左と思われるので、特に「心」の例を強調しながらこの文章を訳してみる。

「一目見たものは、彼の心に細められていて、何か大切な時がある度ごとによつても、口にそのことはや文章は廻つて表われて来た。耳に聞いたところもやはり同様であった」ということになる。

さて、問題の「目から鼻へ抜ける」の語源的思索に關しては、特に(3)の文中に見える「諷」の字や、またその他の例文にある「誦」の字に注目したのである。「諷」は「誦」と殆ど同義で、『説文』誦、諷也とある。『諸橋大漢和』によれば、諷(そらんずる、そらよみ

す)誦(となへる、そらんずる、ふしをつけてそらよみする)と、殆ど同じい。「誦」の項に「周礼、春官、大司樂の注」倍文曰、誦、以声節之曰誦」とある。「倍」は、やはり、そらよみする、暗誦する義であるから、これでは殆ど同義である。「誦」の方が少し声や節を意識的に取り上げていて、一層音楽性がある様でもある。しかし、「広雅、釋詁四」には、「誦、言也」とあるから、

そうなる可成一般化してしまふ。ところが、ここに注意されるのは、「諷」の項を見るとその最終項に(4)「風に通ず」(樂韻)諷、或作風として、(漢書、田蚡伝)蚡及微言太后風上。「注」師古曰、風、諷曰諷(傳点筆迹)とある。そして「諷詠」「諷誦」「諷嘯」などが、諷語としては目につく。(特に「諷嘯」は、後述する懐良の歌の「息嘯の風」と関連してくるところがあるが、今は触れない)

これを要するに、人の口より出る気は即ち息であり、息は風となり、それは心奥に発して「ことば」未生の時、既にその先きに萌してその生成を導き、詩となり歌となり文となる。それは感動の息とともに口より発し、鼻より抜ける。『大漢和』の「風」の項には、(釈名、秋夭)(前略)青徐言風、歛口開唇、推氣言之、風放也、一氣放散也。また、(白虎通、八風)風之為言明也。とあり、更に、(山海經、大荒西經の注)風、曲

也。「論衡 明堂」風乎舞雩。風、歌也。と見えてゐる。

(舞雩は明堂の祭、又其の祭壇。古天を祭り雨乞ふする時に女巫を師とて舞ふ)

舞雩降詠は舞雩に遊戯詩を詠しなから降る。自然を樂しむ快楽といふ。

「論衡 先達」風乎舞雩。詠而降。——『大漢和詩集』

「目から鼻へ抜ける」という詞の奇妙な呪術にかか  
つて、わたくしは、それまで送っかけていた『古事記序文』

に關する本来の思索を、いつの間にか中断してしま  
つて、わたくしは「ことば」という不可思議な、そ  
して宿命的な対象——それはわたくし自身の主体的な  
成分でもあるので、更にやつかりな、のっぴきならな  
い相手なのであるが——のことを考えながら、暫く傍  
道へと誘ひ出されてしまった。でも、この様な散策は  
実に楽しい。もつと語源的彷徨を続けてみようと思つ  
のだが、一応、これまでの思索にしめくくりを与えて  
みかねばならぬ。「目から鼻へ抜ける」という成語は、  
その「鼻へ」というところに表現上のひねりがあるの  
で急に迷めて来るのだが、つまりは「目から入った  
文章が、いつかその人のものとなって、時として口を  
ついで出てくる。しかも間髪を入れず自家意識の中のも  
のとする程に聰明であること」の意がその本義である  
と解される。だから、これはやはり、中国の典籍にそ  
の典故が求められる語句である、と言わねばならぬ。  
さて、ここで思い出されたのは『万葉集』巻五にあ

る山上憶良の歌である。それは「日本挽歌」に続く五  
首の反歌の第五番目、つまり最終位置を占めて、それ  
迄の歌作(漢詩文をも含む)のすべてを総括すること  
くに思われる「五九九」の歌である。

大野山霧立ちわたるわが嘆くおきその風に霧立ち  
わたる

その「於伎蘇乃可是」という語は『万葉集』中他に  
類語がないので、古采諸説があるが、多くは「息吹の  
風」の意に解して、憶良の嘆きの息が風となって霧を  
生ぜしめたということであろう、としている。そして、  
「大野山一面に霧が立っている。私の嘆息する息の風  
のせいで、大野山一面に霧が立っている」と訳されて  
いる。(注)

よく、冬の寒い日の朝など、自分の吐く息が白く空  
気の中に流れ出るのを見ては、ほはあ、これが「於伎  
蘇の風」なんだなと思つたことがある。平常は目に見  
えない「風」を自然の中に僅かながらも見ることのでき  
た瞬時の生活体験を捉えて、それを、山容を隠すはか  
りに立ちこめる自然の大自然の業へ結びつけようとする。  
いはば「合自然」的な理解の祖み立て方に、いかにも  
古代人らしいヤリ方を見ることができて、それにしても  
何と子供っぽく大げさなと少し面くらいながらも、お  
もしろく感じたことがあつたのを思い出す。だが、今

のわたくしには、単純にただ「ため息」という以上に、もつと具体的にその息の風に乗りながら現われ出る一連の「ことば」そのものまでを指しているのだけあるまいかと思えてくる。つまりこの場合に於ては、徳良が今、大伴旅人に宛てて奉っている長文の漢詩と序、そしてそれに続く「日本挽歌」と更にそれ等の一連の諷詠を吟い収めるために、彼が付け加えなければならなかつた五首もの反歌——その最後に据えられた

「和何郡宜久、於彼蘇乃可是」は、つまり、それ等すべて、彼の口を衝いて流れ出す濃厚な「わが嘆きのことば」による作品群「そのもの」ではなかつたか。その一連の思想の発露によって、今、目前にある大野山の山容は嘆きの霧にしばしば蔽い尽されようとする。それは比喩や修辞ではなく、儼然たる実象として並べられているところに注目しなければならぬ。この表現の背後には中国風の天人感応思想も、それが隠良であるだけに考えたくもなまのであるが、わたくしはこの場合をむしろ、額田王や人麿の作歌に見られる自然融合の古樸な、それだけに雄渾な、そして呪術的な初期万葉の系脈を受け継いで、その残照の中にこの歌を据えて把えたいと持が強い。それは、額田王が三輪山の雲に向かつて呼びかける「情あらむ隠さふべしや」（巻一、一八）の声であり、人麿が近江琵琶都で「さそ

なみの志質の辛時」に呼びかけ「さそなみの志質の大わだ」に呼びかけて行く声（巻一、三〇、三二）——「初」自然ではなくて「合」自然的な、したがって、それは極めて呪術的世界の認識の系脈に即していると思われる。それは、人格的な生活共同体意識のうち、に外界をその低さつくり受容することが可能となる、あの靈的原始的な意識においてである。その様に見て采れば、これ等一連の「日本挽歌」を取り巻く悲しみの歌賦の洞窟は、『古典文学大系』の頭注が示す様に、『文選』、『莊子』、『淮南子』、『抱朴子』、『礼記』、『博物志』として更に、『漢沢仙典の』、『維摩経』、『涅槃経』、『仏説譬喻経』、『金光明最勝王経』、『法華経』等、海彼の内・外典の夥しい思想的片鱗に彩られながらも、やはり依然として初期万葉の世界が持つ呪術的系脈の残照の、その終焉としての位置をそこに見出したい、と思うのである。いわば、この国在来のミヤマンの世界感覚が、海彼より押し寄せ、る高度な思想群（儒・道・仙）の波に洗われながら、その中に次第に埋没し、消失して行こうとするその下限をここに見せられる思いがする、と言ひ直してもよい。

それはともかく、この小柄において確かめておきたいことは、隠良が詠う「於彼蘇乃可是」の「風は、詩歌あるいは詩文を意味する」「風賦」（『随書 音楽志』

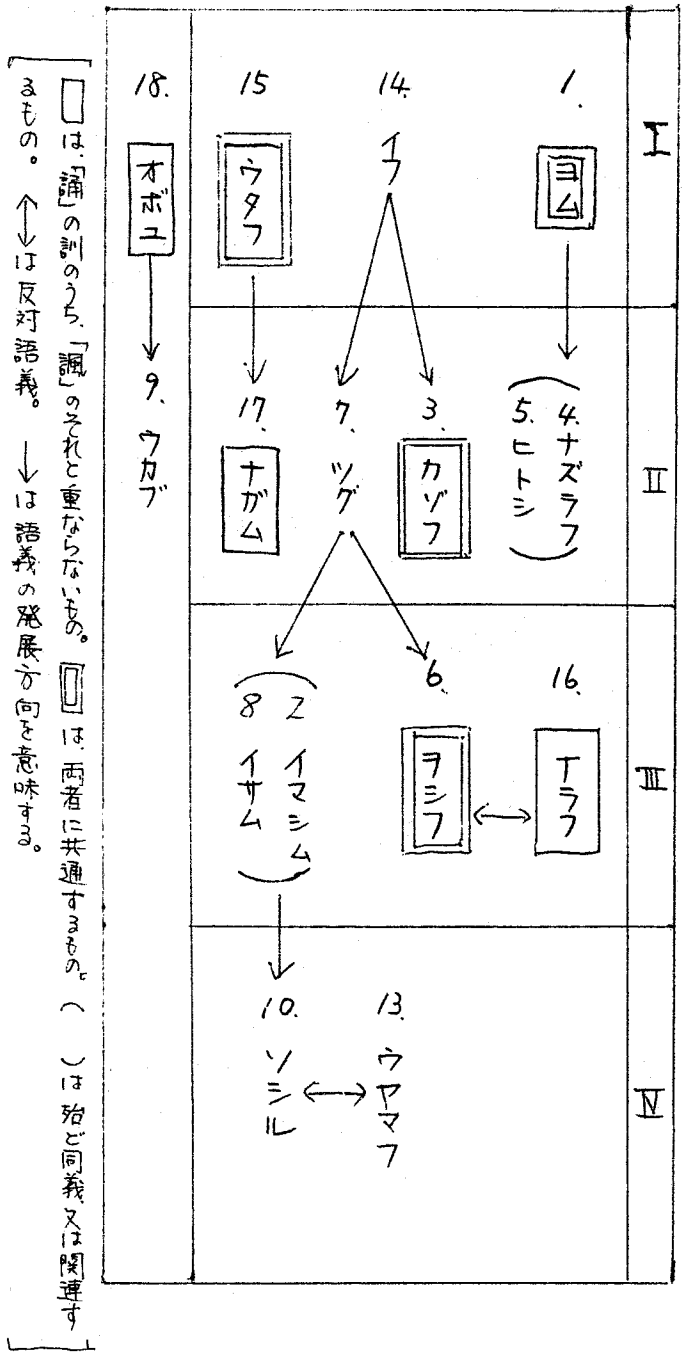
[表 I]

風		誦		諷		
名	伊	名	伊	名	伊	
		ヨム	ヨム	ヨム		1
				シイマ	シイマ	2
				フカゾ		3
				ラナズ		4
				フシト		5
ヲシフ	ヲシフ		ヲシフ	ヲシフ	ヲシフ	6
ツク	ツク			ツク		7
				ムイサ		8
				ブウカ		9
				ルシ	ソル	10
				ヒタ		11
				カワツ		12
				マウフヤ		13
				イフ		14
		フウタ		フウタ		15
			フアラ			16
			ムナガ			17
			ユボ			18
			ジユ	ジウス		19

教之以風賦、弘之以孝友。「風雅」(「文選序」)「風雅之道、  
 粲然可觀」などの意をも、その歎きの溜息の呼吸と同  
 時に籠めていたのではないかと、ということなのである。  
 更に考えを進めれば、「風」は中国詩論における「六義」  
 の筆頭に来る。それは庶民の声である。彼の歌風が  
 「雅」であるよりは「風」の要素に大きく傾斜していたこ  
 とは自明である。とすれば……と考えて行きたくなる  
 が、それはこの場合としては余りに考え過ぎであるか  
 もしれない。ここは寧ろ最も平凡に、「諷詠」あるいは  
 「諷誦」の意と解するのが、やはり穩当であろう。そ

の場合、先述した「諷嘯」の語が、再び心に残る。  
 「わたくしの、悲しみにくれた胸中の溜息と共に吐  
 き出された以上一連の諷詠によって、大野山の上には  
 霧がしきりに立ち渡って、その山容を晴らすうとはし  
 ない。それは今、わたくしの心にある悲しみの念いの  
 投影として、しきりに立ち渡ってやまないのである。  
 ああ」と——以上一連の作品群の全容をもち、こ  
 んで神の語りつつ終っている。そのように受け取ること  
 はできないであろうか。

[表 II]



風	
名	伊
オモシロシ、カゼ、フク、カゼフク、スグル、シルス、キガス、タフ	ハナルツ、ハヤシ、ホノカ、トシ、ヲトヅル、タヨリ、ツタフ、ウゴク、スズシ、スグレ、スミヤカナリ
ホノカナリ、ナメク、キル、ハナルツ、オトツル、ハルカナリ	
ツタフ、ノリ、ツトメテ、ツヨメク、アマル	

[伊は伊呂波字類抄、名は類聚を義抄と指す。排列の順序は原文のままに従った。濁点は便宜上筆者が補った]

20

さて、この二つが、わが國の古事書に於いて「風」「調」  
 として「風」それぞれの訓を調べてみると「表工」の  
 二とくである。尤も「調」「誦」については、ノ「ヨム」  
 3、「カゾフ」6、「ヲシフ」15、「ウタフ」で共通すると  
 ころがあるが「風」を合せて見ると、6「ヲシフ」が  
 圧倒的に強い。計五例、そして、7「ツグ」が三例と  
 なって注目される。以上「表工」の訓の大部分は、言  
 語の発声に関して共通する語彙に属すると思われる。  
 試みに「表工」の諸訓を、語彙の発展系統を考へなが  
 ら図示してみると「表工」のようになる。(「風」の20  
 は除いて考える。また、19「ジュス・ジュ」は音読に  
 よるもの、11「タトヒ」12「ワヅカ」は副詞であるか  
 ら、いずれも除外したい) 諸訓のうち、概念発生の原  
 初的、従って基本的な段階と思われるものを工として、  
 ノ「ヨム」14「イフ」15「ウタフ」の三系統に分けた。  
 それに続く、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの発展段階は、必ずしも厳密  
 なものではないが、一応、意識内容の低次から高次へ  
 の流れを示した。この場合、見過ごせないのは、やは  
 り、Ⅱ「オボユ」の存在である。これは、特にⅢ・Ⅳ  
 段階、つまり情意の心的作用が複雑化するにつれて、  
 すべての訓の内容に関連する。従って、これは、欄外  
 に置く。

さて、問題の「風」であるが、「調」「誦」と共通して

いる訓としては、先述したように「ヲシフ」「ツグ」が  
 ある。これら二訓を「表工」の語彙発展表で見ると、  
 それらは「イフ」系統の中にあつて、「イフ」→「ツグ」  
 →「ヲシフ」と発展する。いわば、一つの根幹的系統  
 であることが分かる。特に「ヲシフ」は、2「イマシム」  
 8「イサム」や16「ナラフ」とは交差する中心の位置  
 を占めている点も注目され、また、先述したように計  
 五例を数える点とも合せて、その重要なことが理解さ  
 れよう。そしてまた「ツグ」も、計三例ではあるが、  
 「風」「調」にだけ共通していることを注意したい。つ  
 まり、「風」は「調」と密接である。しかし、ここにまた、  
 更に指摘しておきたいことは「風」の訓として「名義抄」  
 の欄(20)の中に挙げられた諸訓群の中に「コエ」があ  
 ることである。これも、本稿の場合、特に重要である  
 と思われる。

以上の諸点を要約すると、憶良が「おきそのかせ」  
 と歌つたあの「風」という語には、「人声」を出して「告  
 げ」「教える」の意味が籠められていはいはしなかつたか。  
 そう言へば、憶良の「蓋聞く、田生の起滅すること  
 は」に始まり、「嗚呼哀しきかも」に終る長文の漢詩  
 と、二行の漢文序とによって徐ろに導かれる「日本挽  
 歌」というあの作品群は、内・外典の思索に貫かれた、  
 一種の「教化」の文字とも受け取られまいであらうか。



それは、愛妻を辺境に亡くした上司旅人への憶良の想  
うな思いやりであったか、あるいは、彼自身の不幸を  
超克する声であったか。それは、文末に「筑前国守山  
上憶良上」とあるし、また、万葉集巻五の巻頭、太宰  
帥大伴御凶問に報ふる歌「七九三 世の中は空しきも  
の知る時しいよよますます悲しかりけり」に接して  
もいるので、わたくしには、やはり前者であると思え  
るのだが、その証左として、前述した「風」の中に、

「声に出して告げ教える意」が籠められていることを  
挙げることもできはしないか。特に漢詩文から長歌ま  
での、詩々として教諭しているような対句仕立ての  
詩賦や長歌の歌いぶりに、その事象への志向を顕著に  
感じさせられるのである。「日本挽歌」の長歌について  
は、古来その文芸性が高く評価されて来たとは必ずし  
も言えないが、それは、前に布置された「教化」的詩  
賦の及ぼした余波に由ると思われる。ところが、その  
後に並ぶ五首の反歌群に至ると、俄然、憶良自身の個  
人的な高い抒情性によって歌い上げられて行くのであ  
るが、これは、彼の詩境が、捧げられた旅人の心情に  
全く同調合体し得た結果であると思われる。そして、  
その極致に采る「おきその風」の最終歌において、彼  
の心境は、全く目前の大野山の風光までも合体抱擁し  
得たと解されるのであるが、ならば、ますますその

「風は、以上一連の制作すべてをあげて、指し示して  
いよと考えざるを得ないのである。

尚、諸注も既に指摘するところであるが、この歌に  
おいて「霧立ち渡る」と古樸に重畳する、二句・五句  
反復の詠風の中にも、何かしら初期万葉に通じるこ  
ろがあるように思われて「雲だちにも情あらむ……」  
の歌あたりが再び、甦って来てしかたがないのである。

さて、「鼻へ抜ける話」が余りに拡がってしまったが、  
話を元に戻して、鼻は息であり、風であり、ことばで  
あり、遂には詩文の諷諭であり……と連結して語彙  
を採った訳であるが、そもそも、この「目から鼻へ抜  
ける」という成語の語源的な由来については、巻間に、  
突拍子もない話——大仏さまの目から入って鼻の穴  
から出て来た智慧者の話というのがあつたらしいが、そ  
れでは余りにおもしろさが過ぎて、何か落語まがいと  
言いたくなる。

ところで、その後発行された『日本国語大辞典』(小  
学館)を見ると、あつた。「目から鼻へ抜ける」(目  
延には)「(句明暗)夏目秋石」と並んで、「一フニフお  
女房と見へて、目から鼻へぬけそうなる。古のよい笑顔  
よし」(浮世草子「赤鳥帽子都丸賢」)「打連て行奥から  
口。目から鼻へ抜目のない女主人」(浄瑠璃「新版歌糸文」

「油屋」とある。やはり、思っていた通り、近世であつた。そこでまた、あの日の後に刊行された大野善氏の『古語辞典』をひらいて見ると、こちらにもやはりあつた。「目から鼻へ抜くるばかりの鬼の面」(俳諧「屋網」下)——鬼の面の恐ろしさ、物々しさに反して、それを外し、手に取られた時の鬼の面の、だだ目と鼻と、四つの穴があいているばかりの呆気なさに、今さらアツケウカンと呆れかえっている気持のためいながら、俳諧になつてゐる。あるいは、その四つの穴を覗きながら、「これを顔に着けて人を怖がらせている。さき人も大へん苦勞なことだ。な、さぞかし息も内に籠つて苦しいであろう。お気の毒」と、あらためて見直すと鬼の面が、表面の恐ろしい形相とは裏腹な滑稽味もそこに浮んで、これまた、俳諧となつて来よう。しかし、これでは、この成語の本義は全く失われてしまつた。と言ふ外ない。前の、浮世草子や浄瑠璃の文句の方は、「弁舌」へと続き、また、「口」を受けてゐるので、まだしも、その「ことば」から生じる本義は生かされてゐると言ふべきであらうが。

ともあれ、これは近世の造語であつた。そして淵源すれば、これもやはり中国種であつたと判つて、何故かしらを堵した。

(注1) 西宮一民「古事記の文体を中心として」(上田五昭編 日本文化の探究「古事記」昭52年 社会思想社)

(注2) 高木市之助・田辺幸雄編『萬葉集』(日本古典鑑賞講座 第三卷 昭33年 角川書店)

岩波・日本古典文学大系『萬葉集』の解も同様である。

(注3) 「詩、大序」詩有六義 一日風 二日賦 三日比 四日興 五日雅 六日頌 上以風化下、下以風利上、主文而諷諫、言之有無罪、聞之有足以戒、故曰風(下略)

(注4) 『時代別国語大辞典・上代篇』「おきそ」の項に、  
 「オキソ」の例は他にないが……神代紀下に「弟居乘而嘯（おきそ）……」など、人間の歎息と自然現象の霧・風とを関係づけることによくある」とあり、  
 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広校注『萬葉集』二(日本古典文学全集 昭47年 小学館) 頭注に、  
 「オキソ」は、（おきそ）「嘯」の義か」と見える。  
 (注5) 天明五年 咄本『猫に小判』(私鬼堂万福) 不仙「てましても目からはなへぬけおつた」(江戸語大辞典 前田勇編 昭49年 講談社) となつたのがそれらしく、また見ていない。